

<ミニレポート>

映画撮影受入事例に見た課題整理

～函館地域フィルムコミッション事業推進へ向けて～

平成14年12月
永澤 大樹

フィルムコミッションとは

フィルムコミッションは、映画、テレビ、CMなどの映像製作において、映画・映像製作者と地域の行政・市民の橋渡し役として、撮影に係わる幅広い作業をコーディネートし製作者に有利な環境を構築し、映像製作上の優位性をアピールし撮影を積極的に誘致することを事業目的としている。また、事業推進によって映像産業への市民の理解、協力、参加を促し、国際的な観光振興、映像産業の育成や地域文化の振興を促進させることも大きな趣旨である。

既に欧米の映画業界には、フィルムコミッションの無い地域では映画撮影が出来ない制度も存在するなど、フィルムコミッションの存在は当然視される状況にある。日本では自治体を中心に、観光協会や商工会議所などが協力して発足するケースが多いほか、NPO法人を設立するなどの動きも見られる。現在「全国フィルムコミッション連絡協議会」に加盟する団体は約20まで増え、設立計画や加盟予定等も含めると倍近い地域にフィルムコミッションが誕生していると言える。

本報告書では、映画撮影が実施されるに至るまでの製作側の動きに沿って、具体的な事例を交えながら課題を整理することとしたい。

フィルムコミッション提唱の背景

戦後約60本の映画の撮影舞台となってきた街、函館。古くから絵になる街として知られてきた当地はまた、映画人にもよく知られ愛されてきた街である。この街を創作拠点にしている作家や映画監督もおり、失われつつある日本の風景を求め函館を撮影地に選択する事例などもあるなど、街全体が持つ光と影は地域の財産として未来へ維持していくべきであると思われる。

これまで8回の開催を行ってきた「函館港イルミネーション映画祭」(6回目から改称し現在に至る)は、「映画の街函館」として広くアピールしていこうという趣旨で始まり現在に至る。その活動は毎年12月の映画祭の実施だけにとどまらず、フィルムコミッションが世間に知られる前からその意義を提唱しシンポジウムを開催、函館ロケ作品の主要撮影地を紹介したロケマップやロケ地ガイドブックの作成、同じくロケ作品パネル展の実施や、映像文化に親しんで貰うためのサマースクール(映画学校)を実施するなど、年間を通じその裾野の拡大のための事業を行っている。特筆出来るのは、函館発の映画を作ろうと始まったシナリオ大賞の実施であり、平成12年まで5回に亘り開催し選ばれた優秀作品の中から「パコダテ人」「オー・ド・ヴィ」の2本が、翌13年には同時に映画化され、内外から注目を集めた。両作品の函館ロケには映画祭実行委員会が全面協力している。

当地域におけるフィルムコミッション施策推進に対する熱の高まりは、こうした絵になる街としての地域特性に加え、それを地域づくりに繋げたいという市民の想いや取り組みが、映画映像にまつわる事業やロケ受入コーディネートという形で継続されてきたからこそである。そして本レポートは、過去からのロケ受入実績や今回2作品の映画製作に密接にかかわる中から浮き彫りとなった現状を記すことで、ひいてはそれがフィルムコミッション施策推進への礎となることを願うものである。

コーディネーターの役割

地方での映画ロケ実現化に至る過程の中で重要なのが、ロケハン（ロケーション・ハンティング、和製英語）である。製作者が頭に描く映像イメージを実際の風景に置き換えていく作業であり、ここに必要となるのが受入側のロケコーディネーターの存在である。

製作者は実際に撮影が実現できるかどうか、構想段階において現地を訪れ、コーディネーターと共にロケハンを行う。その一般的な仕事内容について、函館において民間の立場から長年に亘りコーディネーターとしての活動を行っている方の取り組みを例に紹介する。

ロケハンの実施においては、コーディネーターの力量が特に問われる。それはすなわち、作品のシナリオを深く読み、情景を街とを重ね合わせてイメージする力である。提示条件に対する候補地をやみくもに見せれば良いということではなく、その作品のイメージ・物語の流れ・シーンの繋がりなどを考慮し、時に夕方・深夜・早朝など時間帯で変わる風景も想定しながら街を紹介していくのがロケコーディネーターの本質だという。過去には、撮影場所の選定において製作側の多くの要求に従うあまり、彼らの持つイメージ以上に街を見せてしまったが故に、彼ら自身が決断すべきタイミングで決断出来なくなり、それが製作全般に悪い影響を与えてしまったということもある。要求に対する理解力と提案力が大きなポイントとも言える。

無事ロケハンを終え撮影場所が決定すると、製作側は具体的な作業へ進む。撮影1ヶ月前には監督・美術監督・プロデューサー・製作担当者らが現地に入り、最終的な摺り合わせを行う。製作担当者そのまま現地に残り、撮影直前まで細やかな調整を行い作業の整理を行っていく。調整段階において、製作側から提示される要求として主なものを列記すると以下ようになる。

- ・撮影に必要な物品や施設の確保
- ・撮影期間中におけるスタッフの宿泊飲食の確保
- ・撮影許認可やスケジュール調整といった製作事務のサポート
- ・エキストラ出演や撮影スタッフなどの人的支援

以降は、上記各作業についての詳細を順に説明する。

頼む側と頼まれる側の微妙な関係

ロケコーディネーターは製作側と受入側の橋渡しと冒頭に紹介したが、実はあまり綺麗な役回りでは無いとも言われる。

具体的な観点を比較した場合、製作側の立場に立つと、撮影は芸術の追求であり、かつビジネスでもあり、スタッフは良い作品を創り上げるという使命のために力を尽くすこととなる。

一方、ロケ受入側から見ると、製作側が持つビジネス的意識だけでは解決できない側面があり、製作側からの強引な依頼等にトラブルを抱えることも少なくない。それは、ロケ実施に際しては全般的に、受入側のボランティア意識に依存する面が大きいという背景が存在するからである。

実例として製作側と受入側の認識のズレが頻出するのが、依頼の同時進行による複数ブッキ

ングの発生である。依頼を受ける側は、製作側の希望や要求に応えるべくあの手この手で努力し物的人的資源を確保するのだが、製作側はこうした依頼を別の経路でも同時進行させるため、一つの依頼に二つ以上のブッキングが発生するケースが多い。そうすると、そのどちらかはキャンセルせねばならない事となるのだが、もしこのブッキングが人々の善意やボランタリーによって苦勞の末に築かれたものであればある程、キャンセルの際の残念感や失望感は増大する。

こうした例を見ても、ロケ実施には製作側と受入側の良好な関係の構築が常に求められる。受入側としてそのパイプ役となるコーディネーターは、どこまで製作側の要望に耳を傾けるかを判断しながら、情報の整理仕分を行うことも大きな仕事となり、様々な負担が生じる立場である。

深く、広く、街を知る

ロケ実現に向けての「お願い」行脚は多岐に亘る。撮影に使用する住居・店舗・建造物の使用許諾のため、警察・消防・自治体といった行政への許認可、交渉作業には労力の大半を費やすこととなる。それがたとえ海や山や公園でも所管省庁の縛りが存在したり、ふとした街角でも手続きが発生する。加えて、撮影地近隣への周知や協力依頼、宿泊や弁当など滞在中の食住確保、美術演出に係わる準備、航空などスタッフ移動手段の確保と交渉も同時に進行。製作費を極力安く抑えるためのアイデアや交渉も、受入側のコーディネーターも含め頭を悩ませることとなる。

ロケハンの中で提示される様々な要求の中で、手配に苦慮をするものは多い。中でも、一定期間を占有せねばならない性質の物品、例えば撮影機材輸送用のトラック、俳優が移動・休憩に使うためのワゴン車などいわゆる「車両・特機」、また機材・美術道具保管などの倉庫、ミーティング等を実施するためのスタッフルームなどの「施設」は、特に金銭的な面から見ても大変である。こうした専門性の高い部類の物品手配が円滑に行えるかどうか、フィルムコミッションには求められる点となる。

更に、実際に撮影とは関連しない地域情報の提供を求められる事も多く、その点でもコーディネーターは本物の街を知り、伝えていくという役割を担っている。撮影地の地域情報は狭い映画業界の中で「あの街のあの風景は使える」「あの街でロケをするならあの店の名物は必ず食べるべき」というように瞬く間に拡がる性質を持っており、偽りの情報はすぐに見破られ悪印象に繋がるのである。

人的支援に際しての課題

おおよその準備が整うと、いよいよクランクインへの秒読みとなる。この頃には全ての撮影スケジュールが固まり、作業分担も終了、美術スタッフは既に現地入りし細かな造作物の作成を進めている。受入側も支援体制がある程度構築された状態で、クランクイン後の人的協力に備えることとなる。

受入地域での人的要請として機会、人数とも最も多いのが、エキストラ出演者の確保である。これは、中央では細かなニーズに応じて確保出来る脇役等の出演者が、移動経費等の問題によ

り地方ロケでは最小限に抑えられるという点に起因しており、受入地域でのエキストラに対するニーズは通行人・群衆と言った役に限らず、セリフや演技が割り当てられた重要な役回りであることも多い。そうしたニーズに対応するため、地元エキストラの確保において最も重要なのが、受入側の人的ネットワークであることは瞭然である。

そのエキストラ出演者確保などにおいて、抱えている課題も多い。例えば作品の撮影手法によっては、各シーンに対し随時エキストラの要求が行われる事も少なくなく、「当日依頼、翌日出演」と言ったケースも実際に頻出する。撮影は平日・休日・昼夜・場所問わず行われていることもあり、性別・年齢・特徴等、製作側から提示された出演条件を満たすエキストラを即座に確保することは相応の人的ネットワークをもってしても困難なことである。フィルムコミッションとして組織的な活動を実施する際には、「エキストラ人材バンク」的な仕組みの構築が必要不可欠となると言える。特に、地元には劇団等がある場合は貴重な人的資源であり、協力関係を持つ事も大切である。こうした人脈は関連する分野に強いパイプを持つことからその重要性が高いと言えよう。

また地元エキストラについては、出演する側の認識の低さも改善せねばならない。撮影の現場はあくまでも監督の進行管理や俳優陣の演技成果によって進められるため、エキストラの出演がやってくるまでの待機時間や拘束時間は必然的に長くなり、不満の声が聞こえることが多い。

そしてもう一つ、エキストラ出演者の中から生じる不満として、出演報酬の問題がある。製作現場での全体予算におけるエキストラ報酬の位置づけは明確ではないことも多く、悪天候・長時間など厳しい撮影条件下であったとしても一般的なエキストラ出演者に対して報酬支払が行われるケースは少ない。(実際にはTシャツ・タオル・ボールペンと言った簡易な関連商品などの物品提供が行われる場合が多い)

従来から、地方ロケにおけるエキストラ出演や製作協力スタッフの確保は、撮影そのものの珍しさや撮影参加による異文化体験といった、地域住民の好奇心や善意において成り立ってきたという背景が存在する。しかし協力者の善意にはそれぞれ差があることから、協力者が持つそれぞれの「善意の領域」を超えた撮影状況となった時に、上記のような不満が生じるのが少なくなかったのも事実である。そして、コーディネーターはこうした不満の受け口ともなってきた。

こうした不満の解消のためには、良い作品を創り上げるという目的の中で出演側の善意やボランティアと製作側の要求とのバランスをどのように構築するかが重要なポイントであり、両者間の認識のズレを生ませないためにも、エキストラ出演者にはあらかじめ撮影現場やエキストラという立場に対する理解を深めて貰うことが必要と思われる。

「ロケ公害」の撲滅を

製作側に求められる点としてまず挙げられるのは、ロケ現場に対する配慮である。確かに、総合芸術としての映画を追求する現場に対し、周囲や市民への配慮を願う事自体筋違いなことかもしれないが、一般的な市民感覚からすると「撮影の為ならば何をしてもいい」という事では決して無い。現実的にはそこにトラブルが発生する事例が多く、予定撮影時間超過による口

ケ地の長期占有、借用設備の現況復帰を行わないといった約束違反、日常生活に影響を及ぼす撮影時の騒音などは「ロケ公害」とまで言われ嫌悪される顕著なケースである。製作側も通常であれば、ロケ実施予定地近隣への挨拶まわりなどを実施しているが、予定外の展開が発生した場合には対応しきれない事が多い。また、協力を頂いたロケ場所のイメージを損ねるストーリー内容である場合にも、受け入れ側の気持ちを著しく損ねることとなる。こうした地元での悪い評判はロケ受入に対する心象の悪さに繋がることとなり、フィルムコミッション事業推進の阻害要因の一つともなりかねない。円滑なロケ実施には、コーディネートを行う受入側は地域住民との意思疎通を日頃から図っておくことが重要であり、時には製作側に対してのトラブル回避指導も求められる。

「非営利」と「民業」

フィルムコミッション事業の推進においては、非営利のフィルムコミッション事業と、民業としてのロケコーディネートの間での役割分担という課題がある。地域において過去から民間主導によりロケコーディネートが行われてきた場合によく聞かれる話であり、実際にコーディネーター業務が民業・営利業として成り立つ首都圏では総合的なフィルムコミッション組織が必要とされず、東京都が設置した「東京ロケーションボックス」が役割を限定して事業展開しているのはこのためとも言われる。故に、民間のコーディネーター業務とフィルムコミッション事業の役割分担を行うことでお互いが補完しあいメリットを生むシステムの構築も必要となる。

東京ロケーションボックスが対象外と規定している業務（同 website より抜粋）

- (1) 民間の施設等に対する撮影許可の申請受付や調整業務
- (2) 東京都外の撮影場所に関する情報提供
- (3) 宿泊施設等に関する情報提供や斡旋
- (4) 通訳・エキストラ等のボランティア募集や情報提供
- (5) 撮影機材・弁当等の斡旋や手配

課題整理と私案

このように、いくつかの課題を明記していくと、地域におけるフィルムコミッション事業の推進にはいくつかのポイントが見いだせる。一つは、施策推進のための具体事業の実施、もう一つは、公的機関・民業それぞれの役割分担の実施である。

特に役割分担については、来るべき時代の中では民間非営利団体（NPO）という力の存在も、施策推進においては不可欠な存在となってくるように思われ、行政・NPO・民間という関係の中での役割分担を行い、製作者や地元住民にとって混乱・不利益の無い事業運営を行う必要があると思われる。

以上のことを踏まえ、次ページ表に私案として、それぞれの立場における役割と課題を整理してとりまとめた。

(表) フィルムコミッション施策推進における双方の役割と課題(網掛けは分担領域)

行政組織の役割・課題	NPO 等で 対応可 の領域	営利民間業者の役割・課題
事業自体のPR + 製作会社等へのプロモーション		
「窓口」機能としての、撮影附帯情報の積極提供・発信 + 地域情報の発信 + 写真資料の蓄積発信(インターネット等の活用)		
ロケ実施に際しての地域への理解要請・周知(トラブル事前抑制)		
ロケ撮影対象が具体的な場合の対応		
		ロケ撮影対象が抽象的な場合の、作品内容理解把握、情景精査と対応
行政・監督省庁に対する許認可の便宜		
(相談のみ受付体制を構築)		手配困難な物事・検討を要する物事に対する便宜(予算・車両・特機・施設等)
(相談のみ受付体制を構築)		ロケ実施中のトラブル対応(病気・ケガ等)
カネが絡む物事と絡まない物事の整理・仕分		
ボランティア人材に依頼出来る物事と出来ない物事の整理		
ボランティア人材提供体制の構築 + 人材データベース等の構築(エキストラ及び専門人材の登録・インターネット等の活用)		
人事異動が発生しても一定の対応が可能な環境づくり + ワークフローやデータの整備・引継等		事業展開が困難になった際を想定したデータ・ノウハウ継承・人材育成

おわりに - フィルムコミッションの現在

地方における街づくりの新たなキーワードとして根付きつつあり、しばしば地域振興モデルとしてニュース等にも登場するようになったフィルムコミッション。しかし、現在はまだ組織を設立することに一過性の盛り上がりを見せるだけで、その後の各地での展開は明瞭に把握できる状態ではなく、折角の事業が地域に根付き効果を上げているかを検証する機会もない。フィルムコミッション間の競争もクローズアップされつつあり、様々な媒体を用いたPR合戦は激化の様相を見せているのだが、本来の目的でもある「製作者側にとってどれだけ必要とされる存在であるか」「製作者が求める物事に対するサービスを提供できているか」という点では、未だ発展途上とも言えるだろう。

＝＝＝＝＝

冒頭解説の通り、地域にとって映画映像の誘致には大きく三つのメリットがある。一つは経済的なメリット、一つは観光振興、もう一つは文化振興。

経済的なメリットには二つの側面がある。一つは製作スタッフが期間中に落とす直接的な経済効果（次項表参照）、もう一方では、映画がヒットすることで、ロケ地が観光名所として知られるようになり観光客誘致に繋がる間接的な経済効果。北海道だけで見ても、小樽を舞台にした「LOVE LETTER」や、空知管内の「すずらん」「鉄道員」「幸せの黄色いハンカチ」、富良野地域では「北の国から」など、多くの作品が観光客を惹きつけ根付いている。

また文化振興という点で見ても、製作側と地元住民が一つの作品製作を通じ交流することにより、新たな人間力を創造するという点で効果が大きいと言える。函館でも一つの事例として、映画「いつかギラギラする日」にエキストラとして参加した女学生が、出演者達との交流の中で歌手を志し、後にロックバンド「JUDY and MARY」のボーカル YUKI として日本の音楽シーンに名を刻む存在となったのは若者の間でよく知られている。

以上、本報告書に見られるように、真に意義ある事業展開を行おうとしたときには、整理すべき課題は多い。だが何よりも重要なのは、非営利かつ市民のボランティアによって支えられる傾向の強いフィルムコミッション事業が、製作者にとっても、地域住民にとっても、地域経済にも行政にも、誰もが喜ぶことの出来るような役割を果たす機関として世に認められ、事業推進を行っていくことであると思われる。

（参考）撮影地における直接的経済効果のモデル例（撮影期間4週間）

種別	人数	単価	回数	計
スタッフ宿泊費	40	4,000	28	4,480,000
キャスト宿泊費	15	8,000	20	2,400,000
昼夕2食・飲食料費	60	1,000	28	1,680,000
車両・特機等現地借用費		8,000	15	120,000
地元人材依頼費		5,000	15	75,000
店舗等借用・営業補償費		50,000	15	750,000
構造物改造・修繕費		100,000	4	400,000
各種現地調達物品費		200,000	1	200,000
撮影打ち入りパーティ	50	3,500	1	175,000
撮影打ち上げパーティ	70	3,500	1	245,000
合計				10,525,000

算出単価は過去複数の事例から想定したモデルであり、映画自体の総予算により大幅に変動する。また上記以外にも、現地で舞台美術設営を行う場合には相応の費用、生活経費として土産・飲食・遊興等スタッフ個別の経費が発生する。

（以上）